

李漁の戯曲とその改編小説

蕭 涵 珍

一 前書き

世界各国の文学史上、小説と戯曲が互いに影響し合う、或いは流用し合うといった現象は普遍的に存在している。日本において浄瑠璃や歌舞伎が草双紙に改編されるように、中国でも小説を戯曲に、戯曲を小説に改編する例が多く見られる。小説と戯曲とによって、その名を世に広く知られた明末清初の作家、李漁はかつて自らの小説「醜郎君怕嬌偏得艶」（『無声戯』）、「寡婦設計贅新郎 衆美齐心奪才子」（『連城壁』）、「譚楚玉戯裡伝情 劉藐姑曲終死節」（以下「劉藐姑曲終死節」と略記。『連城壁』）、「生我楼」（『十二楼』）を戯曲『奈何天』、『比目魚』、『鳳求凰』、『巧团圆』に改編した。また、「小説は音声のない戯曲」という考え方から短編小説集を『無声戯』と名づけた。李漁は戯曲と小説との密接な関係を深く認識していたのである。その李漁の戯曲もまた、後世の作者の手で小説に改編されている。改編作の例としては、『比目魚』を改編した松竹草廬愛月主人の小説『戲中戯』及び『比目魚』、『意中縁』を改編した南陵居士戲蝶逸人の小説『意中縁』、また作者不詳の小説としては『風箏誤』を改編した『風箏配』、『奈何天』を改編した『痴人福』などの作品が挙げられる。いずれも李漁作の内容を高度に踏襲するものである。

本稿では、上記の改編作と李漁の作品の比較研究を通して、李漁が後世の小説に及ぼした影響を考察したい。まず、上に挙げた『戲中戯』及び『比目魚』、『痴人福』、『風箏配』の四種の小説作品を中心として、李漁の原作（戯曲と小説）との違いを考察する¹⁾。次に、その改編の傾向や優劣について検討する。そして最後に、『戲中戯』及び『比目魚』、『痴人福』の

三作が、同じジャンルの李漁の小説を改編の底本にせず、わざわざ戯曲を小説にした理由を明らかにしつつ、李漁の戯曲と小説がどのような特徴を有しているのか、どのように受容されたのかなどの諸点について解明したい。

上記の改編作に関しては、これまで詳細な紹介や比較研究がなかったが、李漁自身が改編した四つの戯曲とその底本に関する先行研究は、黄強、郭英徳、胡元翎、岡晴夫など、多くの研究者が行っている²⁾。拙稿では、これらの成果を参照しつつ、李漁作と後世の改編作との比較研究を行いたい。

本題に入る前に、まず李漁の小説「醜郎君怕嬌偏得艶」、「劉藐姑曲終死節」と戯曲『奈何天』、『比目魚』、『風箏誤』、『意中縁』、またその改編小説の版本について簡単に紹介する。

「醜郎君怕嬌偏得艶」は順治十三年（一六五六）に刊行された『無声戯小説』一集十二篇（また全集十二集及び外篇六卷からなる『連城壁』）に収録されている短篇小说である³⁾。拙稿では、『古本小説集成』（上海古籍出版社）に収録されている『無声戯小説』（尊経閣版）を底本とする。

「劉藐姑曲終死節」は順治十四年（一六五七）に刊行された『無声戯小説』二集六篇（または『連城壁』）に収録された短篇小说である。拙稿では、佐伯市市立図書館所蔵『連城壁』（汲古書院出版）を底本とする。

『風箏誤』（三十齣）、『意中縁』（三十齣）、『奈何天』（三十齣）、『比目魚』（三十二齣）四作は、順治九年（一六五二）、順治十年（一六五三）、順治十四年（一六五七）、順治十八年（一六六一）に上梓されている。いずれも初めは単行本として出版されたが、後に『笠翁伝奇十種』の一種として、翼聖堂と世徳堂から出版された。翻刻本の多くは『笠翁十種曲』と改名されている⁴⁾。拙稿では、『李漁全集』（成文出版社）に影印されている世徳堂版を底本とする。

また、南陵居士戲蝶逸人の小説『意中縁』全六回は出版年不詳である。拙稿では、『古本小説集成』（上海古籍出版社）に収録されている『意中縁』（悦花楼蔵版）をテキストとする。

松竹草廬愛月主人の小説『戯中戯』及び『比目魚』は、李漁の戯曲『比

目魚』を二部に分けて改編したもので、康熙中期以後に出版された作品である⁵⁾。拙稿では、『古本小説集成』（上海古籍出版社）に収録されている『戯中戯』及び『比目魚』（嘯花軒刊本）をテキストとする。

作者不詳の小説『痴人福』全八回は嘉慶十年（一八〇六）に刊行された。拙稿では、『古本小説集成』（上海古籍出版社）に収録されている『痴人福』（雲秀軒刊本）をテキストとする。同じく作者不詳の小説『風箏配』全八回は出版年不詳である。拙稿では、『古本小説集成』（上海古籍出版社）に収録されている『風箏配』（本堂蔵版）をテキストとする。

二 李漁の「醜郎君怕嬌偏得艶」、『奈何天』と作者不詳の『痴人福』

小説「醜郎君怕嬌偏得艶」は以下のような話である。主人公の闕里侯は、裕福だが醜悪で愚鈍な男である。その妻となった鄒氏は夫を嫌い、家の中に禅室を作って、夫と別居してしまう。闕里侯は次に何氏と結婚するが、これも同じ結果になる。三回目の結婚で、闕里侯は袁進士の妾である呉氏を間違って娶り、袁進士に送り返そうとするが、袁進士はそれを断り、呉氏に「紅顔薄命」という理屈を説いて、自分の運命を受け入れるよう勧める。そして、呉氏は同じ理屈を説いて闕里侯と別居した鄒氏と何氏を説得し、最後には三人共に夫に仕えるようになる。

戯曲『奈何天』では、後半の部分が変更されている。闕里侯は辺地に糧食を献納した功績により、天子によって侯爵に封じられる。また、彼の行為に感動した神は、修正使者を派遣し、彼の容貌を修正して、知恵も授ける。その結果、鄒氏と何氏も思い直して、闕里侯に仕えるようになる。

李漁は、「醜郎君怕嬌偏得艶」の入話として「世の中の婚姻には、夫婦の組み合わせの誤りが多く、人を恨ませずにはおかない⁶⁾」、「美人が醜い夫と結婚したり、才女が平凡な人と結婚したりということになると、あるのはどこにも通じない破滅の道ばかりで、これこそ正真正銘の苦痛である⁷⁾」と述べ、自分と釣り合わない男と結婚した女性の悲哀に、理解と同情を示している。そして、苦しい境遇におかれて逃げ道もない女性を、「紅顔薄命」という思想で慰めている。一方、『奈何天』では、神や天子などの外的な作用が添加され、また、最終的には闕里侯の外見と地位が全面

的に修正されるという、よりドラマチックな展開となっている。『奈何天』は、「よいことをすれば、よい報いがある」という応報思想を強め、教化の意図を明確にしているが、小説の本意を相対的に弱めることになっており、李漁ならではの独創的な見解も窺えなくなっている。

小説『痴人福』は、李漁の戯曲『奈何天』を底本としている⁸⁾。『痴人福』が『奈何天』を改編した主な箇所は、以下のようなものである。

まず、主人公闕素封（字は里侯）の名前と字を、田北平（字は万鍾）にしており、渾名である「闕不全」を「填不平」にしている。田北平と「填不平」は音声的に僅か一字の差であることから、改編者が両者の関連性を強化する意図が読み取れる。但し、胡元翎が指摘したように、李漁は闕里侯を以って、呉氏の前夫である袁滢と対照させており、「闕」と「袁」という名字の裏には、「缺」と「円」という対立の概念が含まれている⁹⁾が、改編者が袁滢（字は濯氷）を唐滢（字は子才）にした点を見れば、李漁の真意を察していないことがわかる。また、『痴人福』の第七回で、糧食不足の辺地で軍隊を統率する唐滢は田北平が糧食を献納する通知を読んだ時、「この田素封という名前、私は聞き覚えがあります¹⁰⁾」と言っているが、「田素封」は、李漁作の闕素封からの影響で、田北平（或いは田万鍾）の間違いであろう。このように検討してみると、『痴人福』の改編には緻密さが欠けていることがわかる。

次に色事の描写について見てみる。蘭九章は、李漁は小説における情事の場合では、「半句を言い、半句を保留する」（説半句、留半句）、「他の事を借りて喩える」（借他事喻之）のように描写しているが、戯曲では時々俗悪の筆致で描写していると論じている¹¹⁾。例えば、「醜郎君怕嬌偏得艶」では、闕里侯の妻、鄒氏と何氏が禅室に閉じこもったことについて、「何氏は鄒氏の才華を愛し、鄒氏は何氏の美貌を愛する。二人は女夫婦になったが、闕里侯は逆にそれを見て何もできずに、傍で焼きもちを焼いていた¹²⁾」と描写している。『奈何天』では、上記の描写に、「彼女たちは禅室の中で、極めて親しくなり、離れがたい仲になりました¹³⁾」と添加したり、禅室にいる鄒氏が何氏に、「今宵は、暫く苦しい涙を止め、一先ず顰めた眉を伸ばしましょう。香りの良い肌を密着させて、スタイルを比べ

て量りましょう¹⁴⁾」と歌った曲を加えたりしており、女性同士の親密な感情を明白に表わし、同性愛を連想できる暗示をも与えている¹⁵⁾。

『痴人福』は、『奈何天』のような描き方で鄒氏と何氏の仲を描写しているだけではなく、唐滢（袁滢）の二人の妾の関係にも女子同性愛の要素を取り入れ、彼女達の情欲を大胆に描いている。『奈何天』では、袁滢は赴任した前夜、嫉妬深い正妻と共に部屋に入り、妾の周氏、呉氏を残した。その時、周氏は「彼ら二人は共に寝屋に入ってしまった。私たち二人に一つの灯火を伴わせて。なんと寂しいことでしょう¹⁶⁾」と嘆く。呉氏は「彼女を咎めないで。私たちはこのような容貌を持つので、元々苦難を蒙るべきなのです。もしあのような顔に似ていれば、自ずと幸せな日々を送れます¹⁷⁾」と慰める。しかし、『痴人福』の同じ場面では、呉氏は「姉様今宵は、いっそのこと、私の部屋に寝に来たほうがいいのではないのでしょうか。また賑やかになります¹⁸⁾」、「私に一つのものがあり、あのものとほぼ同じです。二人で賑やかにやりましょう¹⁹⁾」と周氏に提案し、二人は抱き合っけて部屋に入った。この加筆は、女性同士の肉体関係を一層明らかに表現させており、作品も益々卑俗になっている。恐らく改編者は、『奈何天』における女子同性愛を連想させる要素や、当時の艶情小説で時々言及される女性同士の情欲関係から影響を受けたのであろう。

最後に、『痴人福』のエンディングを見てみる。『痴人福』は『奈何天』のもとに、千五百字以上の内容を添加して各キャラクターの結末を述べている。その内容を要約すると、以下のようなものである。唐滢の赴任中に二人の妾を密かに他家に嫁がせた正妻は、唐滢と仲直りするために一人の綺麗な妾を夫に送った。後に唐滢は栄達し、妻妾はそれぞれ儿女二人を生んだ。その子供たちは皆顯位に就き、代々高官になった。田北平は四人の息子をもうけた。その息子たちも皆科擧に合格した。この加筆内容には、個人の出世、家庭の円満、子孫の栄達など当時の人々が憧れている理想的な人生図を呈しており、読者の期待に応える改編者の配慮がよく表れている。

三 李漁の「劉藐姑曲終死節」、『比目魚』と松竹草廬愛月主人の『戲中戲』及び『比目魚』

小説「劉藐姑曲終死節」では、女旦の劉藐姑に恋をした書生の譚楚玉は、「浄」の配役（敵役）として劇団に入り、後に「生」の配役（女旦の相手役）になる。二人は互い愛慕し合い、晏公寺で結婚の約束をする。ところが、劉藐姑の母親が、娘をある富豪の妾にしようとしたため、二人は戯曲「荊釵記」を演じる間に、川に身を投げて心中する。結局、二人は晏公の神力で命を保ち、莫漁翁に助けられて結婚する。後に、譚楚玉は科挙に合格して出世するが、二人は莫漁翁夫婦と共に隠棲する。

戯曲『比目魚』の筋は「劉藐姑曲終死節」とほぼ同じであるが、譚楚玉が軍隊を率いて山賊と戦うことや、莫漁翁の本名と字を慕容介（字石公）にし、彼が密かに退隠する高官であることなどを添加している。

松竹草廬愛月主人の『戲中戲』及び『比目魚』の内容は、李漁作を多く踏襲しているが、添加された筋は四つの改編作の中で最も多い。その主な箇所は、以下のようなものである。

まず、藐姑と譚楚玉が川に身を投げた後、二人が晏公の神力で命を保ち、水族の世界を遊歴し、水晶宮で夫婦の契りを結ぶ内容を添加している。また、後に莫漁翁夫婦が挙げる結婚式で、楚玉と藐姑が「今日のことはまた夢であるかどうかわからない²⁰⁾」と話す場面を加えている。改編者はここで、李漁作における現実の空間と芝居の空間との対照の他に、現実の空間と神の空間との対照をも作り出している。但し、藐姑と譚楚玉の新婚初夜に関する詳細な描写や彼らの雲雨に情欲を挑まれる召使たちの真似事から見れば、改編者が異世界の遊歴や男女の色事を売り物にし、読者の興味を寄せ集めたり、好奇心を満足させたりする意図を持っていた可能性も否定できない。

続いて藐姑と譚楚玉の交際に関する描写について。李漁の「劉藐姑曲終死節」では、藐姑と譚楚玉がセリフを練習するふりをして話し合ったり、二人きりになった時に晏公の神像の前で結婚の約束をしたりする場面がある。戯曲『比目魚』では、役者たちが譚楚玉を殴った時、藐姑が止めよう

とするふりをして譚楚玉の手を握ったり、彼とこっそり戯れたりする場面がある。松竹草廬愛月主人の改編作になると、藐姑の行動は益々大胆になり、欲情もエスカレートしている。

例えば、ある日藐姑が朝ご飯を済ませて曲芸を習う教室に入ると、そこには譚楚玉一人しかいない。二人は、恐れはするがむしろ喜んでいる。藐姑は譚楚玉を「この部屋の後ろには小さな空家があります。茅葺でぼろぼろですが、人が稀にしか来ない所です。私たちはそこに行って常に抱いてきた願いを少しでも叶えましょうか²¹⁾」と積極的に誘う。あいにく第三者が教室に入ってきたので、二人は三人で人を背負う遊びをしようと提案する。改編者は、藐姑が譚楚玉に背負われる場面について「そのまま小さな足を曲げ、また二本のしなやかな手を楚玉の腕の上に置いて、まず彼の口をこすり合わせ、そして彼の喉をこすり合わせる²²⁾」と詳細に描かれている。この描写は読者に生々しいエロチックな想像を与える一方、原作の描いた貞節のヒロインを、主人公を誘惑する不謹慎な女性に一変させている。これは、李漁原作をそのまま使った、藐姑が曲芸を学び始めた頃のセリフ、「唯凡そ忠孝節義、儒教に関する戯曲なら、私は学びます。それら淫らな詞や艶かしい曲を演じると、廉恥が壊れ、名誉と節操を失います。私は決して学びません²³⁾」と対照した時、ヒロインの性格における不自然さはきわめて明らかであろう。よって、改編者は原作全体を綿密に改変したというより、都合の良い箇所新たな筋を添加するという形で作品を構成したことがわかる。

最後に、松竹草廬愛月主人の『戯中戯』及び『比目魚』のエンディングを見てみる。松竹草廬愛月主人は、莫漁翁が後に妾を娶って子供をもうけることや、譚楚玉夫婦が二人の息子を得て、息子たちが科挙に合格し、家が繁栄し続けたことを添加している。この加筆内容は、「劉藐姑曲終死節」における「残念なのは二人に息子がいないことだ。藐姑の容貌はあまりにも艶かしく、息子を産むのにとても適しているとは言えない²⁴⁾」という結末と違い、李漁作で円満な結末に達せなかった箇所をを全て補っている。その動機は恐らく『痴人福』の加筆と同じものと思われる。ちなみに、四つの改編作において、変更された箇所が最も少ない南陵居士戯蝶逸

人の『意中縁』の唯一の長い加筆は、正にエンディングの部分にある。

四 李漁の『風箏誤』と作者不詳の『風箏配』

戯曲『風箏誤』の内容は以下のようなものである。

才子韓琦仲は幼い頃両親が亡くなり、父の友人である戚補臣に育て上げられ、その息子の戚友先と共に勉強する。遊興を好む戚友先は、ある日韓琦仲が詩を書きつけた凧を揚げた時、糸が切れて、詹烈侯の屋敷に落ちる。凧を拾った詹烈侯の次女詹淑娟は、その詩の韻と同じ韻を使って作った詩を書きつける。戚友先の下僕は詹家に凧を返させる。韓琦仲は淑娟の詩が書かれた凧を見て、彼女の才華を慕い、婚姻を結ぼうと考える。彼は戚友先に倣い、凧に詩を題して、詹烈侯の屋敷に落とす。あいにく、その凧が落ちたのは詹烈侯の長女詹愛娟の庭であった。愛娟は腰元に頼んで妹淑娟の名義を借り、戚友先と名乗った韓琦仲を寝屋に連れ込む。愚かで醜い愛娟と会った韓琦仲は慌てて詹家から逃げ出す。その後、戚補臣は科挙に合格した韓琦仲に淑娟を結婚相手と定める。淑娟を嘗て会った醜女（愛娟）だと思い込んだ韓琦仲は強く拒否するが、戚補臣の意見に背くことができず、淑娟と結婚する。そこで彼は初めて前会った醜女は淑娟ではないことを知り、夫婦仲良く暮らすようになる。

一方、愛娟は戚友先と結婚させられる。彼女は、結婚相手が前に会った才子（韓琦仲）だと思い、当時のことを言い出す。愛娟の不謹慎な行為を知った戚友先は、大変怒る。彼の怒気をおさめるため、愛娟はやむなく戚友先に妾を娶ることを許可する。後に、戚友先は淑娟に惚れ、彼女と密通したいと思い、妾を娶らないと約束して、愛娟の協力を求める。結局、戚友先は望みを遂げられず、妾を娶る権利も失う。

董馥榮は小説『風箏配』について、その内容は李漁の原作とほぼ類似しているが、蛮族との戦争や韓琦仲の悪夢などの筋は削除され、「詹烈侯は晩年息子を得て、戚友先夫婦は改心する」というエンディングを添加している²⁵⁾、と説明している。だが、これらの変更の他に、改編者には原作にある下品なキャラクターの言動を一層嫌らしいものに変更する傾向が見られる。

その代表的な例としては、詹烈侯の長女詹愛娟に関する描写を挙げてみる。『風箏誤』では、詹愛娟は「容貌が綺麗ではないだけではなく、性格もまた頑固で愚かである²⁶⁾」と描かれており、韓琦仲との初対面で「戚様、戚様、この二日間私はあなたのことを死ぬほど思っています²⁷⁾」と言いつつ、韓琦仲を抱きしめたり、「今は一刻千金の時なのに、どうして詩を吟ずる時間がありますか。私とあなたは一先ず大事なことを済ませてから、また吟じて遅くないのです²⁸⁾」と言って韓琦仲をベッドへ引き込んだりする様が描写されている。

『風箏配』はさらに、詹愛娟の性格に「性格は放蕩であり、举止は軽薄である²⁹⁾」という性格を付け加え、彼女が腰元に頼んで韓琦仲を寢屋に連れ込むことについても多く加筆している。愛娟は韓琦仲と対面した後、すぐ彼の手を引っ張り、ベッドに座らせ、「足一本は韓生の足の上に置き、腕一本は韓生の背中にかけ、手で韓生の手を握る。また曰く、『わたしはあなたのことを死ぬほど思っています。今日あなたと会えて本当に嬉しく思います。早くベッドに上がって、その良いことを成しましょう³⁰⁾』」と自ら売り込んでいる。韓琦仲が激しく拒んでいるにもかかわらず、愛娟は彼を押し倒し、服を脱がそうとした。この描写は、『風箏誤』の内容を基にし、詹愛娟の言動を一々鮮明に描き、彼女の形象をさらに劣化させている。

また、『風箏配』における詹愛娟の腰元は「年は四十に近いが、男子を思わない心は一晩にもあらず³¹⁾」と作り上げられている。韓琦仲が詹家を逃げ出した際に、彼女の「あなたがお嬢様という鮮やかで美しい花を摘み取られたのは、全て私の力によるものでした。私という咲き残った花を、あなたは明日必ず摘み取りに来てください³²⁾……」というセリフには、原作にはない軽薄且つ滑稽なイメージが含まれている。

五 まとめ

これまでの分析を通して、李漁の戯曲の改編小説は、それぞれ異なる作者の手で改編されたものであるが、いずれの作品も「エンディングの加筆」、「色事の描写の増加」という二つの共通点を有することがわかる。前

者は読者の期待に応じるために添加したと思われる。後者の大半は、李漁作における曖昧な色事の描写（初夜の情事、女性同性愛、卑猥な人物の言動など）を一層詳細にし、作品の卑俗な一面を強化している。こうしたことから見て、読者のレベルは李漁の原作より低かったものと推測される。また、我々が加筆の箇所をほぼ推測できることから見て、ある意味で、李漁作は既に上記のような改編の可能性を孕んでいたことがわかる。これが「詞曲は李漁に至り、猥褻且つ瑣末の極まりである」という批判を招く傍証にもなるのであろう³³⁾。

続いて李漁の作品の受容に関して、一つの興味深い点について論じておきたい。上記の改編作はいずれも李漁小説ではなく戯曲から影響を受けたものである。『戯中戯』及び『比目魚』と『痴人福』二作は、類似の内容である李漁の小説「劉藐姑曲終死節」と「醜郎君怕嬌偏得艶」を改編の底本とせず、わざわざジャンルの異なる戯曲『比目魚』と『奈何天』を底本に選んでいる。改編者たちは何故小説より戯曲の方を好んだのであろうか。これに関しては、二つの点が考えられよう。

まず、李漁の戯曲の字数はその小説より遥かに多く、単行本として出版するに相応しい分量である。例えば、藐姑と譚楚玉の話に関して、小説は二万字にも足りない短編物であるが、戯曲は八万字に近い長編物である。闕里侯の話でも、小説は一万五千字前後であるが、戯曲は八万字に近い。李漁の小説と比べれば、戯曲を底本にした方が改編に手間が掛からないことは明らかである。

また、改編作は原作をより通俗化する方針で加筆している。『痴人福』において主人公の名前を間違えていることや、『戯中戯』及び『比目魚』のヒロインの性格が一貫していない欠点から見れば、改編者は李漁の独特の思想に感銘して、自らの創作意図に応じて作品を新たな形で再生したというわけではなく、単に内容の面白さや枠組みの巧妙さに目に付けて通俗化しただけのようである。

李漁の小説はよく伝統的規範を揶揄しながら、それを一度解体し、再構築したり、自らの見解を呈したりしている。胡元翎が、李漁は小説を創作する際、「立言（後世まで伝わるような立派な言葉を述べる）」を常に考

え、小説の入話から正文まで、読者に何かを教えようという意志を込めている、と指摘しているように³⁴⁾、彼の小説には、複雑な考え方や独特の価値観が含まれている。一方、李漁の戯曲は劇的な要素を多く取り入れ、よりドラマチックに作り上げられている。例えば『風箏誤』には、腰元が韓琦仲を迎えに行った時、二人が深夜の闇の中で互いを探り合う場面がある。これは歌舞伎でもよく使われる「だんまり³⁵⁾」という演出の技法である。また、江戸時代の明和八年（一七七七）出版された八文字屋自笑の『新刻役者綱目』巻一に、『蟹中楼伝奇』の第五、六齣の翻訳を収録しているのは、自笑が『蟹中楼』第五齣における大道具（蟹楼）や煙の仕掛けによる趣向の新奇さに着目したためである、と岡晴夫は指摘している³⁶⁾。こうしたことからわかるように、低俗な加筆で読者の心を引き寄せる改編作にとって、淡白で論理的な李漁の小説よりは、むしろ戯曲の方が改編の底本に相応しかつたのであろう。

こうして李漁の戯曲と小説は、後世の作者たちの手で新しくアレンジされ、原作とは異なる形式で流通した。これらの作品は文学的に価値が低いものであるが、李漁作品の中国における受容状況を理解するために重要なテキストである。李漁の作品の改編作が新たな生命力を得るに至るのは、日本に伝わって後に曲亭馬琴、石川雅望、笠亭仙果によって翻案された作品が登場するまで待たねばならなかった。

注)

- 1) 南陵居士戲蝶逸人の小説『意中縁』は李漁の原作とほぼ一致する故に、独立した一節として論究せず、ただ第三節の最後で提起するにとどめる。
- 2) 黄強『李漁研究』（浙江古籍出版社、一九九六年）。郭英徳「稗官為傳奇藍本—論李漁小説戯曲的敘事技巧」（『文化遺産』、一九九六年第五期）。胡元翎『李漁小説戯曲研究』（中華書局、二〇〇四年）。岡晴夫「戯作者としての李笠翁」（『芸文研究』第四二号、一九八一年）。
- 3) 伊藤漱平の研究によると、李漁は最初に『無声戯小説』（一集）十二篇を刊行し、翌年に『無声戯』（二集）六篇を刊行した。その後、順治十五年（一六五八）に、一集から短篇七篇、二集から中篇五篇を選び、『無声戯合集』十二篇を刊行した。

また、一集と二集の残る六篇を集め、『無声戯外集』を続刊として出した。さらに康熙改元後に、『無声戯合集』の十二篇と『無声戯外集』の六篇を併せ、外集の「拂雲楼」を除き、新しい短篇一篇を加え、杜濬の評や新たな目録を合併し、『覺世名言連城壁』十八篇として刊行した。(伊藤漱平「李漁の小説の版本とその流伝－『無声戯』を中心として(『日本中国学会報』、一九八四年)及び『連城壁(下) 解題』(佐伯文庫叢刊、一九八九年)、「李漁の戯曲小説の成立とその刊刻」『二松学舎大学大学院紀要(一)』(二松学舎大学、一九八七年)による。)

- 4) 『李漁全集』第四卷『笠翁伝奇十種』(上)(浙江古籍出版社、一九九二年)の点校説明を参考にした。李亜力の「李漁與翼聖堂、芥子園書坊關係考辨」(『文獻』、二〇一〇年十月第四期、五十九頁)には、「康熙年間に、翼聖堂より出版された李漁の伝奇十種は、『巧団圓』を除き、残りの九種の挿絵の絵師と版木を彫刻する技師は全て杭州の胡念翊、蔡思璜らである。……これは、使われた版木は李漁が杭州から持って来たものであることを示している」とある。
- 5) 『戯中戯』及び『比目魚』(上海古籍出版社、一九九一年)における李夢生が執筆する紹介を参考した。
- 6) 原文：世上姻縁一事，錯配者多，使人不能無恨。
- 7) 原文：(只有)美妻嫁了醜夫，才女配了俗子，止有兩扇死門，並無半條生路，這纔叫做真苦。
- 8) 孫楷第『中國通俗小說書目』(作家出版社、一九五七年)、一四五頁。袁世碩は、この作品の底本は李漁の小説「醜郎君怕嬌偏得艶」だと主張した上で、「李漁の伝奇『奈何天』もまた同じストーリーを有している。本書が変更したのはストーリーのエンディングである。李漁の作品では、三人の美人が仕方なく、我慢して生涯醜い夫と平穩に過ごした。それ故に、その伝奇を『奈何天』と名づけている」と述べている。(『奈何天』(上海古籍出版社、一九九二年)の前書きより。)しかし、『痴人福』のエンディングにおける闕里侯が神の力で外見を修正された筋から見れば、筆者は『痴人福』の底本は戯曲『奈何天』である可能性が高いと思う。
- 9) 胡元翎『李漁小説戯曲研究』(中華書局、二〇〇四年)、一四二頁。
- 10) 原文：這田素封的名字，我有些記得。
- 11) 蔭九章「李漁“四種小説”與“四部傳奇”辨析－兼論李漁“劇”論和小説創作的一致性」『四川戲劇』(二〇一〇年第三期)、四一頁。
- 12) 原文：何愛鄒之才，鄒愛何之貌，兩個做了一對沒卯的夫妻，闕里侯倒睜著眼睛在旁邊吃醋。
- 13) 第十八齣「改閔」。原文：他們在靜室之中，好不綢繆繆繆。

- 14) 第十四齣「狡脫」。原文：今夜呵，權收苦淚，且舒皺眉，把香肌熨貼，較瘦論肥。
- 15) 張在舟『曖昧の歷程－中國古代同性戀史』（中州古籍出版社，二〇〇一年）では、『奈何天』の鄒氏と何氏や、『痴人福』の呉氏と周氏の関係を文学作品における女子同性愛の例として挙げている。
- 16) 第五齣「隱妬」。原文：他們兩口雙雙進房去了，叫我們兩個獨守孤燈，怎生寂寞得過？
- 17) 第五齣「隱妬」。原文：不要怪他，我們有了這種姿容，原該受苦；若還也像那副嘴臉，自然有好日子過了。
- 18) 第三回「醜媳婦隱妒侍夫」。原文：姐姐今晚，不如到我房裡來去睡，還有熱鬧之處。
- 19) 第三回「醜媳婦隱妒侍夫」。原文：我有一件東西，同那話兒差不多，大家來去鬧熱。
- 20) 第十二回。原文：今日之事，未知又是夢中否。
- 21) 第三回。原文：這屋後有閑屋半間，雖是茸茅不堪，卻是人迹罕到。你我到彼略償宿願何如。
- 22) 第三回。原文：（藐姑）遂將一隻小小的金蓮撓起，又把兩支摻摻的柔荑搭在楚王的膀臂上，先擗他嘴，繼擗他喉。
- 23) 原文：（只是一件，）但凡忠孝節義，有關名教的戲文，孩兒便學；那些淫詞豔曲，做來要壞廉恥，喪名節的，孩兒斷不學他。
- 24) 原文：只可惜沒有兒子，因藐姑的容貌過於嬌媚，所以不甚宜男。
- 25) 『風箏配』（上海古籍出版社，一九九〇年）における董馥榮の前書きを参考した。
- 26) 第三齣「閨哄」。原文：貌既不揚，性又頑劣。
- 27) 第十三齣「驚醜」。原文：戚郎，戚郎，這兩日幾乎想殺我也。
- 28) 第十三齣「驚醜」。原文：這是一刻千金的時節，那有功夫念詩？我和你且把正經事做完了，再念也未遲。
- 29) 第一回「戚補臣尚義撫孤 詹烈侯官復原任」。原文：（更兼）性情放蕩，舉止輕狂。
- 30) 第四回「約戚生卻是韓生 認美女忽遇醜女」。原文：一根腿擱在韓生腿上，一根胳膊搭在韓生背上，一枝手捏住韓生的手。又說道：為你幾乎想殺我也。今日見你喜死我也。快些上床睡下，成其好事罷。
- 31) 第三回「故挑引斷風箏線 誤拾遺動醜女情」。原文：（我雖則）年近四十，思想男子之心，無夜無之。
- 32) 第四回「約戚生卻是韓生 認美女忽遇醜女」。原文：小姐的一朵鮮花被你採去，皆我之力。我這一朵殘花，你明日來務必採採……。
- 33) 原文：詞曲至李漁，猥褻瑣碎極矣。黃啟太《詞曲閑評》（《李漁全集》，浙江古籍

出版社，一九九二年）。

- 34) 胡元翎『李漁小説戯曲研究』（中華書局，二〇〇四年），一六九頁。
- 35) 古井戸秀夫の『歌舞伎入門』（岩波書店，二〇〇七年，一一八頁）では，だんま
りを「暗闇の中で，複数の人物が宝物などを探り合う場面」と解釈する。
- 36) 岡晴夫「李笠翁の戯曲と歌舞伎」（『演劇学』第三一号，一九九〇年），九七頁。